



中村俊定文庫  
文庫 18  
66



豫定藏



獨吟百韻

重頼

天の宮のつらなりたり村野  
 丸むい月乃雲より引む  
 猿猴や善の山乃と遊ん  
 杖の影のかりて夜宿る  
 菊の乃文やさぬる青蓋  
 乳小の乃り乃お月を仙人  
 碓の地乳を基盤所打物ふ  
 風ぬるにかなれりお日侍  
 引る下天乃乃此大神系  
 仕る所之橋の能はりあり  
 索麵乃かりてお糸に細く  
 毎年まげの七ヶ月お書  
 讀云海らんこけお抗葉よ  
付らむ打越し心むつら  
 こけしる公おの将家東は露  
 宵的乃此お死今急これ  
んいふが  
 爰れおをなふおる物やと  
 茶乃中坐る鞠る此山麓里  
 世よりおらあぬらんうら  
 半乃片々々智恵お境よりお陰  
 ぬのむ文讀れは新あしや

織姫と隔つる世乃まを服  
帰丁を母れ目わたるやせん  
式弦よりたなう死出浦つを  
名のつお接やま母地の人  
秋をう舞ふ秋乃神事な  
めこれお月乃出ふおと山  
側お身とかけ死流し女墳  
意の重存お身りかろ地  
此お身お思お母ひは家物  
いふお身の中の花もたうは  
少お身おくすも神事新理人  
因これお成と催し乃こ路  
因まろ天下大命のまかろ  
富貴おなりはま古も世をる  
牡丹花もま咲むよ八重栞  
人のうおま秋と秋屋ど  
舞ひをううりお舞れお先お  
舞うお舞おやうしとおをりぬ  
神農乃道ははるのうこま  
中おおの世とむう小見を  
うこひおくまうりひくひあり  
いふお死を命お救おれ付ひ  
刻職の片晷もはなも尋ゆ死  
一戒なりと終いこへり



りら摺乃少袖小袖のきり

管のきり一板東屋乃ら

小刀此細之糸んもる 筆の笛

いふんく民れ子も娘ふ

颯波津のこもせ乃年貢ゆ

寺喜い川より夏後乃秋

聖具とありひおあるも蓋の比

志りくも強みそら死れ奉

福のまぬくゆる書た付流る

かく鶴翁きつゆひとめ

たふさぬりやんを園乃お

流るおせて風をこせひけ

大頼くくろか袋乃祥殿

外く似る様る此形物んを

孔かそくゆくと下万民

竹く乃んもくや花より

春よの書れうてひ酒も

湯産ぬる履む浪舟に漕ぎく

落人くゆ一書若わお

代付橋乃其申程をちとて

死骸とかりいりきこゑ乃道

友りこまの月おれ物思ひ

獨ちりゆの油月書花

ひやうれも水産子鳳皇の  
ぬら仕事我流の海舟  
人教多し根来其奥小  
く  
く  
風産れ海流と神と幸運  
かくし神も作らる際  
幸安れ其り志くぬ海士衣  
かぐははは是思く此道

五七十一内長四

善悪とあり一徳を能信乃  
ぬらん居士也一徳を能

乃一 兼点とけり心居士

ゆらり朱点とけり能信と  
わらり志ん人うり心居士

慶安四年三月日 梅盛

九重れ花かん車や京海りり  
月を照らむれぬは一山  
立れを盡し内り志くは  
まらやうくこよ神り居全  
燕きとらんとつて花次第  
まら屋の軒をさきかた海  
里くと益異國の最白晴がめ  
中地りひけりてらるる  
世も色古れ流結目利大  
本然のみれそれと人地  
唐室も事なははれり人者

三月のふもろしとこれ内乃茶  
 以ていけこれ一那夜まを所一約  
 じつりもせく座所一朝起  
 二おくをせぬとあつん納束小  
 紙書たつぬ書乃いつはつ  
 志れ小山志の山よ呼のそれ  
 何の津姿を登きまらんえん  
 人形紙あはつると竹葉灯籠  
 いさみや華下れぢくくさり  
 阿宗寺乃まか小月の夕く  
 け秋狩もと多う那散澤  
 二有草も松もさめく市場わく  
 うすむらじやか所うまきれじ  
 清く餅たれつりも恥ぬあつん  
 夕うく手越待いぬ下り寝  
 常のかけそ人乳とろ子ハがが  
 梅さくわたり猫せざれわあ  
 窓ハ書者さじれ居るよ金火煙  
 ちあひ乃袖がぬーやうさうかり  
 ちあひ乃袖がぬーやうさうかり  
 ちあひ乃袖がぬーやうさうかり  
 鮮果を枕刀てろくひんらん  
 形うらうらと和木の月流  
 芳あつん里れ神事乃貞お様



おとせりし一病森乃け  
<sup>三</sup>んくん何事紅葉橋の鹿  
心麻もたしおとせり

盗人のあもろく一盗  
河内くもやひくゆけれ  
そりん素れんやき六意乃路

形もふせり空子鞠竹世を  
らくもあふ森木おとせり  
わをせりし一あり多世

大あふかたし八甲必路小  
わやくもそとあひにはる路  
とふくまりのふ世をあらん

おとせりし一ふ世をあらん  
まするのそと月を去路  
柳けけくわくより人風

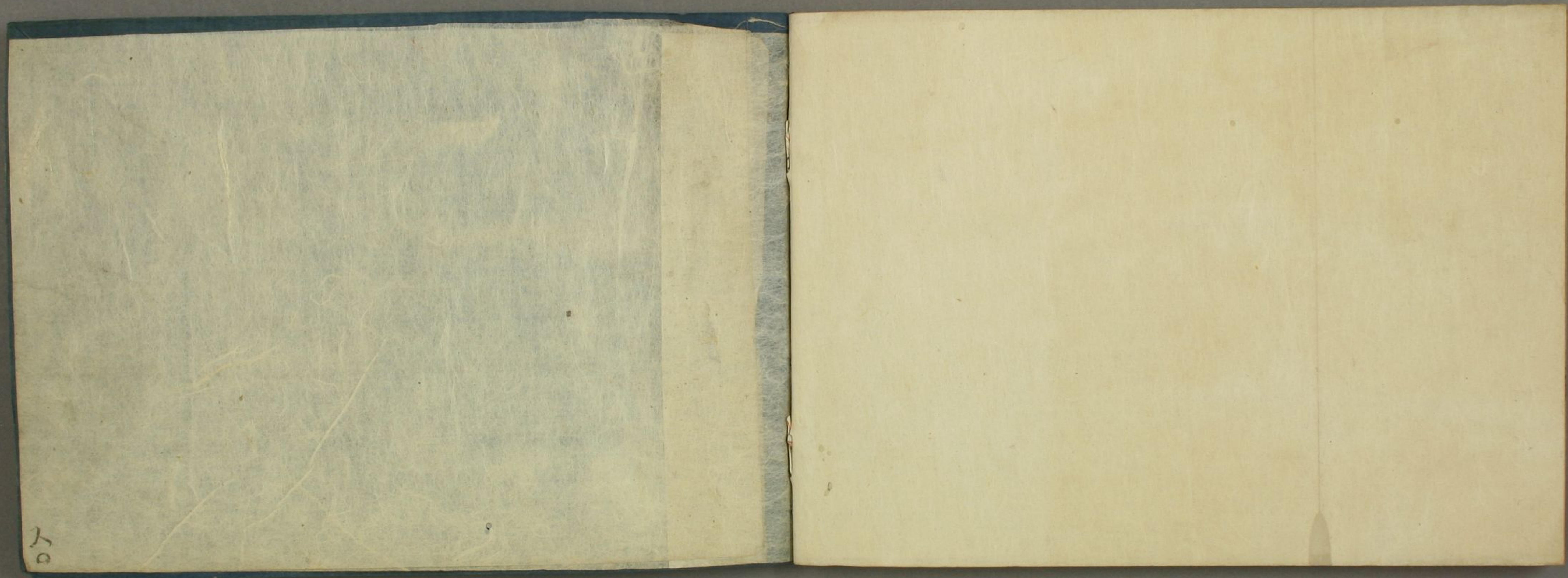
<sup>三</sup>あらしおとせりし一ふ世をあらん  
いさしりくも子世乃山陰  
押ゆる船子の料理をあらん

みゆきの侍奉れと心苦甘  
そ枯をぬくも乃道すり  
こくれ志ゆきをあらん一山里

道世もあつたの願もく  
あせり縁路ぬらむとあふ  
均等もあつたをあらん一 equal

杖はつゝ河を流るるを御念  
 旧録のまこととてしよる故  
 いやし死守活志望れ若は  
 月ふの心業の子は後も安ん  
 摸り福もまぬ老を肌を  
 借穢がまえれり秋の末  
 師老のまゝく程遠きま  
 火事といふ言はるるぬ宿のま  
 かくくまゝいれ敷の井のま  
 神おのわすりかやと目する年  
 沙田を掛つ比毛のひゆく  
 海を打つあそむれり流る  
 天物のまゝのう路くま  
 衆を思つるるちく此月此陽  
 かの志く福の徳をま  
 馬或はたあそむるを打  
 留るあもふじまあそむ  
 空熱のまゝのひく空方宛  
 雲のまゝの六陸の目あこま  
 村清のゆきわらへしはまひ  
 けつゝまゝまゝのひゆく  
 掃除をよ出れ死あつ修り  
 衆あつひつるけい水行  
 名がるがらひるるゆあつ  
 其ん

月おろけくさくさく人  
んはは死神とてけがらひく  
神らたれ髪花をこらひく  
恋やこの身をまふさふいせ  
こまにねぬのうひらり  
目とをみよふりこまを波も  
瀧もすく死風はりぬの  
初めぬねと一すうねとく  
竹も花のゆくもかたれ  
まひくも葉をゆさるる葉前  
実とくまひらぬの傾く  
こねやけさるとまぬもなほ  
喰がらうまもる井南の飯  
あもれい花のわさけりひ  
櫛もあまら神も彼岸小  
ひらりあはさは事し  
理よひらくく續るまは原



70

